

異世界に冒険を求める
のは間違っているだろ
うか

ヘヴン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

都会から離れた田舎の片隅にある鍛冶師だった祖父の家へ、シルバーアクセサリーの練習にやって来たギンジ。

彼は、祖父の工房で偶然見つけた地下金庫の鍵を発見した事で始まる冒険アドベンチャー。

※趣味と自己満足で書いています。

目次

プロローグ	1
1 話 異世界	11
2 話 ファミリア	19
3 話 ヘステイア・ファミリア	28
4 話 初めての冒険と宣伝	34

プロローグ

日本のX県に住んでいる秋山銀司^{あきやまぎんじ}。

将来、シルバーアクセサリーの職人になることを夢見る高校生だ。

そんな彼は夏休みを利用し、泊りがけでシルバーアクセサリーを作る為に8年前に亡くなった祖母の自宅へとやって来た。

彼の祖父は亡くなる前まで、田舎で日用品や刀を作る鍛冶師をしており、自宅の隣には工房がある。

彼は祖父が祖母を追いかけるように亡くなった翌年から、祖父の家と工房を掃除する為と両親に言って、シルバーアクセサリーの道具と材料を持ち込んで、練習をしているのだ。

勿論、使わせてもらっているお礼として家と工房を帰る一日前に掃除を行っている。

「さうして、今日は何を作ろうかな……」

両親から預けられた鍵で工房に入った銀司はシルバーアクセサリーを設計する為の机に座る。

「今日はチェーンに挑戦するか……鎖は最近じゃ全く見ないトーテムポールにでもしよ

う。

名前と設定は……」

画用紙に定規を取り出し、自分の持つイメージと設定を書き込む。

勿論、設定なんか本来は書き込む必要はない。

ただ、彼自身が中二病であり、特殊能力的な設定を盛り込むと制作する時のモチベーションが上昇し、イメージをより明確化する為の儀式のようなものだ。

「発動すると、地面から大きなトーンボールが……」

ブツブツと独り言を呟きながら、漫画家や小説家に登場するような設定を呟きながら書き込む青年。

正直、とても怪しい。

忙しなく動いていた鉛筆が止まった事で設計が終わると、道具の手入れと準備に取り掛かる。

「んっ。」

道具が置いてある道具を取り出していくと彫金する為の金属バーが一本足りない事に気づく。

「やべ……もしかして、前にしまう時に落としたか？」

作業が出来なくなる可能性が脳裏によぎったギンジは慌てて膝を折り、棚の下に手を

伸ばす。

右へ左へ動かす事で埃が舞うが、道具の為に我慢して手探りで探し続ける。

すると棒のような感触を指先に感じたギンジは、それを引っ掴んで、棚の下から取り出した。

「よし・見つけ……あれ？」

道具を発見し、安堵しながら埃まみれの手を見て止まるギンジ。

なんと、彼が道具だと引っ掴んでいたのはお目当ての金属バーと一本の古い鍵だったのだ。

「ホコリまみれでバッチイな……。」

頭部はハートの形をして南京錠などの施錠目的ではなく、アンティークとして楽しむ為の鍵にも見える。

死んだ祖父の物だろうか？

ギンジはホコリまみれの鍵を作業場まで持っていき、鍵についているホコリをエアで勢いよく吹き飛ばす。

吹き飛ばすと、ハートの中心にホコリで隠れていた文字が姿を現した。

《地下金庫の鍵》

ハートの中心にはそう書かれていた。

地下金庫は彼の祖父が遺書や通帳などの財産を保管する以外で使用していた金庫である。

幼いころのギンジが工房を探検していた時に地下で見つけた金庫。

生前の祖父の話では彼の思い出の品が入っているらしい。

「職人で成功した爺さんの思い出の品……」。

もしかして、勉強する時に使った技術書が入っているかもしれない」

若い頃、鍛冶師の世界に彗星の如く現れ、名を轟かせた祖父。

祖父が作り出した刀剣は今でも美術品として高い価値を持ち、美術館に保管されている物も少なくはない。

そんな祖父の思い出の中に技術書があれば、自分のシルバーアクセサリーも……。

偶然に見つけた地下金庫の鍵に淡い期待を抱いたギンジは、速足で地下へと続く階段を下りた。

——。

階段を下りて地下室に入ったギンジは、電気を点けて一番奥の金庫へと突き進む。

右と左の壁には段ボールが詰まれており、部屋の一番奥に目的の金庫が鎮座してい

た。

そして、金庫の扉には南京錠が付けられている。

金庫の前にやって来たギンジはまるで宝を前にしたトレジャーハンターのようにワクワクしていた。

彼は、胸の高鳴りとニヤニヤ顔を抑える事なく、南京錠にカギを差し込んで開錠する。開錠された事で南京錠が外れた。

彼は役目を終えた南京錠を金庫の上に乗せ、重い鉄の扉を開ける。重い鉄の扉が開かれ、中身が電球の光によって姿を現した。

出てきたのは南京錠の鍵によく似たデザインの鍵一本と二冊の本。

それ以外には何も無い。

思い出の品という割には数が少ないと思いつながら、銀司は二冊の本を取り出す。

二冊とも表紙には何も書かれていない為、一冊ずつ中身を確かめる事にしたギンジ。好きなファンタジー小説を読む、様に本を開く。

しかし……。

「なんだ……これ？」

パラパラと本をめくるが書かれているのは日本語でも英語でもない別の言語。

技術漏洩を防ぐ為に祖父が書いた暗号か？

「うわ!？」

突然、本から手を離すギンジ。

なんと、驚くべきことに文字が動き始めたのだ。

「な、なんだよ……これ」

グニャグニャと変形する文字に恐れ戦^{おの}ギンジ。

そして、さらなる恐怖がギンジに襲いかかる。

『アビリテイの引継ぎを始める』

なんと、文字が祖父の顔に変わり、生前と変わらぬ同じ声で口を動かしながらしゃべり始めたのだ。

『移植者が血縁である事を確認。』

アビリテイ《鍛冶》および《神秘》の移植を開始する』

遠慮なしに喋り続ける本から逃げ出そうとするギンジ。

しかし、彼の意識は本から放たれる目に見えない何かによって奪われ、闇に沈んだ。

………。

意識が覚醒した時、彼がはじめに思ったのは冷たいだ。

突つ伏すように床に横たわっていた体を起こし、周りを見渡す。

深い眠りに落ちていたのか、若干頭がフワフワしているが、視界は良好だった。
「地下室……だよな」

そこは、子供の頃から見慣れた祖父の工房の地下室。

辺りは誰もおらず、天上に吊るされた電球の明かりが周りを照らしている。

「そういえば……って、この本……何も書いてないな」

意識を失う前にみた恐ろしい本の事を思い出すも、床で開かれていた本には動く文字もなければ祖父の顔もない真っ白なページが視界に映る。

「文字が……消えている」

ギンジは恐る恐る床に落ちている本を手にとり取ってパラパラとページをめくる。

だが、中身には開いていたページ同様に何も書かれていなかった。

意識を失う前、確かにギンジは喋り出す謎の本に恐怖した。

しかし、今の彼はこの状況にワクワクしている。

まるで、心の奥底で封印していた物が僅かに漏れだすような感覚だ。

ギンジは不意に、もう一冊の本を見る。

この本も先ほどの本と同様に表紙には何も書かれていない。

もしかしたら、また同じ様な物なのかもしれない。

怖い思いをするかも知れない……。

だが、銀司の手は彼の好奇心とワクワクによって、ゆっくりともう一冊の本に伸ばされる。

本を手に取り、細心の注意をはらって本を開く。

すると……。

「…日記か？」

本の内容は先ほどの物とは違って、中身が日本語で書かれている。

内容にはその日の出来事が書かれてあることから日記である事がわかる。

「《俺》って使っているから…爺ちゃんの日記か？」

文字が達筆すぎて、読みづらい文字がいくつもある彼の祖父が残したと思われる日記。

記。

しかし、そんな事は気にならなかった。

彼は三日に一回のペースで書かれている一つの単語……。

《異世界》である。

——。

金庫を開けたギンジは、祖父の残したと思われる物語の様な日記の内容に嵌まっていた。

物語の舞台となる世界はモンスターが生まれるダンジョンがあり、自分が知っている様な神々が地上に降臨している世界。

人々は富と名声を手に入れる為、神々の眷属ファミリーとなり恩恵を与えられる事で冒険者となり、仲間たちと共にダンジョンへと向かう。

当然、ダンジョンには希望だけではなく、絶望も蔓延っている。

しかし、冒険者たちは仲間達の絆と自分たちの力を合わせ、己の夢の為に突き進む。彼の祖父はそんな世界で鍛冶師兼冒険者としての生活を三日置きに送っていたのだ。

この日記には輝かしい夢だけではなく、冒険者達やサポーターと呼ばれる人々の悲しい現実も記されていて中々に面白く、ギンジの心を捉えて離さない。

地下室で日記を最後まで読み切ったギンジは最後のページで止まった。

最後のページには祖父が書き記した異世界に残してある遺産に関する記述と異世界につながる扉と鍵について書かれていた。

ギンジはゴクリと喉を鳴らし、金庫の中に仕舞われている鍵を手を取った。

鍵の持ち手のハートの中心には《異世界の扉》と掘られている。

そして、金庫から離れたギンジは右の壁際に積まれた段ボールを左へと一つ一つ、

ゆっくりと移動させる。

「……あつた」

ギンジは見つけた。

南京錠で鍵が掛けられた異世界への扉を……。

何故、祖父の家にこんなものがあるのか？

誰が、こんなものを作ったのか？

様々な疑問はあれど、ギンジは平和な日本では味わえない冒険へのスタートラインを見つけた。

1話 異世界

都会から離れた田舎の片隅にある鍛冶師だった祖父の家へ、シルバーアクセサリーの練習にやって来たギンジ。

彼は、祖父の工房で偶然見つけた地下金庫の鍵を発見してから、幼いころに夢見ていた冒険の準備を進めていた。

「ガーディアンARM^{アーム}。

《リングアーマー》」

祖父から受け継いだアビリティを利用して林の中に作った手作りの訓練場に出現する人型の姿をした銀色の甲冑。

自然に溢れ、人目がない森の中で……。

人型甲冑はラジオ体操を開始した。

勿論、そのように操作しているのは祖父の遺産である特別な魔法を封印された本によつて祖父のアビリティを引き継いだギンジだ。

彼は、異世界で祖父の様な冒険譚を繰り広げる為の準備として、祖父の日記で異世界

を研究し自分の武器となる魔道具マジックアイテムの制作に乗り出した。

「作るのはギンジの妄想の世界にしか存在しなかった、特殊能力を持つアクセサリだ。

その形状は、リングやペンダント、ブレスレットなど多岐にわたり、様々な能力を有している。

能力を持つ武器に変化する物。

氷・植物・電気などの自然を操り、身体能力を向上させる物。

空間を移動し、別空間を作つて次元を超えたりする物

聖なる力でケガや病気を癒し、呪いを解く物

敵に《呪い》を掛ける事の出来る物

そして今、一心不乱にカシャンカシャンと音を立てながらラジオ体操をしている人型甲冑のように守護者となる魔人や魔獣を呼び出すことの出来る物。

ギンジはこれらを総称してARMアームと名付けた。

「最後のARMも確認できたし……そろそろ行くか」

ラジオ体操を終えた人型甲冑《リングアーマー》の動作確認を終えたギンジは《リングアーマー》を指輪に戻して歩き出す。

高校を卒業した彼は、通信制の大学に進学。

パソコンと自分の荷物を持って、祖父の家で一人暮らしをしている。勿論、すべては異世界で冒険する為の布石だ。

祖父の家に帰り、荷物をまとめたギンジは地下室にある異世界の扉へと赴く。

扉の前に立った彼は、ポケットから鍵を取り出して南京錠に差し込む。

「よしー行くぞー!!」

南京錠を外し、ドアノブを回して勢いよく扉を開けるギンジ。

扉を開けると視線に飛び込んできたのは何も無い闇と悪臭が流れ込んでくる。

ギンジは口と鼻を手で抑えながら、装備していたリュックサックから懐中電灯を取り出し、カチリと懐中電灯の電源を入れた。

目の前の闇を懐中電灯の光で照らすとそこは埃のたまった汚い石造りの部屋だった。

あるのは上につながる階段のみ。

「ここが、爺さんが使っていた拠点の地下室か……」

転移する場所が場所なだけに色々と残念な気持ちになるギンジ。

もし、転移場所を日記で調べていなかったらあまりの汚さに回れ右をしていたかもしれない。

ゆつくりと扉を潜り、部屋へと入っていくギンジ。

彼は扉を閉め、慎重に上に向かう階段へと歩みより、上に何か居るかもしれないと警

戒しながら上っていく。

階段を十段ほど登ると目の前に鋼鉄で出来た扉が懐中電灯の光によって照らし出される。

「本当にダイヤル式だ……用心深いのはいい事だと思うけど、異世界って感じがまるでないな」

ノブの上に設置された四つのダイヤル式のカギを照らしながら溜息を吐くギンジ。

彼は日記に書かれていた通りに四桁の数字を右から左に向かって順番に合わせていく。

最後のダイヤルを合わせるとカチリという音が鳴った。

「どうやら、無事に開錠が出来たようだ。」

ギンジはノブを回し、扉を開ける。

鋼鉄の扉を難なく開けたギンジ。

「これが……爺さんの店か……」

目の前には刀剣などの商品を飾っていただろう埃まみれの鍵付きのガラスケース。

そして、会計を行うであろうカウンター。

天井には魔石の力で店内を明るく照らすと書かれていた照明らしき魔道具が設置されている。

祖父の日記によると、この店はダンジョンのある街、《オラリオ》にある。

いつでも商売や冒険にも出かけられて人通りの多い、北東のメインストリートに建設されている。

立地もいいようで、窓から光が差し込み店内を明るく照らしていた。

地下一階から地上二階までである、この一軒家は異世界初心者であるギンジにとっては最高の拠点である。

ギンジはこれからの自分の生活を妄想しながら懐中電灯の光を消し、リュックサックにしまう。

ここが今日から彼の生活を支える城となる。

「さてーまずは掃除だな!!」

気合を入れたギンジはポケットの中から一本のチェーンを取り出す。

そのチェーンはフックがある部分に猫の頭、鎖の先っぽには鈴のデザインがされている。

「ガーディアンARM! 《メリロ》!!」

ギンジの言葉と共にチェーンがギンジの手から消失すると同時に、彼の目の前に一人の女性が現れる。

ストレートに下ろされ、サラサラとした長い黒髪。

スタイルはまさにボン！キュ！ボン！！の言葉にふさわしい凹凸とした体であり、その肉体を包み込む服は首元に大きな鈴が付いたクラシックなメイド服。

そして何より、彼女の頭部と臀部には猫耳と尻尾が生えていた。

アキバで彼女が現れたなら、男達は彼女を崇拜し、手持ちのスマホでカメラを連射していたであろう。

「あら？今日はいつもの自宅ではないのですね？

お引越してもされたのですか？」

「違うよ。

ここは前に話していた異世界で、爺さんが遺してくれた店だ」

メリロは店の中をキョロキョロと見渡しながら自分の頬に人差し指を当てて、ギンジに質問する。

そんなあざとい仕草に可愛いと感じながら簡単に説明するギンジ。

「あらあら、それは良かったですねギンジ様!!」

「ああ、ありがとうメリロ。」

それでさっそくなんだけど……」

「はい！分かっていますよ!!」

私はご主人様であるギンジ様の生活をサポートするメイドです。

全ての埃を駆逐して見せますよ!!」

ふんす! つと両手を握りしめると同時に脇を引き締めたメリ口はさっそく掃除に取り掛かる。

何もない空間から掃除道具を取り出し、素早い動きで埃を除去していく。

彼女は戦闘能力が皆無である変わりに炊事洗濯大工工事などの生活サポート能力を極めたガーディアン。

彼女が居れば仕事に専念し、充実した日常を送る事が出来るだろう。

ただし、純情な童貞チエリーボーイに彼女を与えれば献身的な彼女と他の女性と比べてしまい、その人生を独身のままで終えてしまうだろう。

ある意味では生まれる可能性があつた子孫たちの存在を抹消し、ダメ人間を製造する恐ろしい兵器なのかもしれない。

みるみる綺麗になっていく店内を眺めながら、その考えに至つたギンジは彼女に類似する執事やメイド型のガーディアンARMの販売と生産中止を心に決めた。

「それでは、これで失礼致します」

「おう、ご苦労さん」

すっかり綺麗となった部屋の中心でギンジにペコリと頭を下げたメリ口にギンジが

労いの言葉を送ると、彼女は元のチェーンへと姿を変えてギンジの手元に戻る。

「さて、これからヘファイストス・ファミリアに向かうか……」

ヘファイストス・ファミリア。

彼の祖父の日記によれば、祖父が所属していたファミリアであり、世界的に有名な武器ブランドらしい。

かつての祖父の様に商売で成功し、冒険でも成功する事を夢見るギンジにとっては祖父と同じファミリアに所属する事が一種のゲン担ぎの様なものであり、入信を決めた。

ギンジはこれより同じ北東のメインストリートにあるヘファイストス・ファミリアのホームへと向かう。

2話 ファミアリア

職人や武器を求める冒険者達で賑わう北東メインストリートを歩き続けるギンジ。

彼の瞳は光り輝いていた。

ドワーフ・エルフ・獣人。

己が作り出したARMではない。

地球では空想の種族とされている人々が冒険者や魔法使いの恰好をして目の前を歩いているのだ。

まさにギンジにとってファンタジーに溢れた理想の光景だった。

田舎者の様なギンジの反応に笑う者達や微笑ましく見る者達も居たが、ギンジには関係ない。

ギンジはこの世界を存分に楽しんでいた。

……。

ゆっくりと景色を楽しみながら《ヘファイストス・ファミリア》ホームのすぐそばへとたどり着いたギンジ。

その表情はとても満足したものであり、仮にファミリアに入れなくても彼は嫌な顔を

せずにギルドに向かって新しいファミリア探しをするだろう。

ワクワクとした気持ちでホームの前に辿り着いたギンジは、ホームの門をノック……。

ポヨン♪

裏拳に伝わるのは木製で出来た門からは考えられない柔らかな感触。

それはそうだ、ギンジがノックしたのは門ではなく……

「え？」

「ん？客か？」

眼帯と褐色肌が目立つ巨乳の美女だったのだから。

どうやら、彼女が扉を引いて開けた事でノックの目標が門から彼女の豊かな胸に強制変更されたらしい。

まるで、ラブコメ主人公の様な奇跡である。

そして、柔らかな感触にフリーズしたギンジだったが、現状を理解し勢いよく美女から離れて頭を下げる。

「すみません!!」

痴漢やセクハラは犯罪である。

異世界に来て早々に牢屋で過ごしたくないギンジは必至で頭を下げた。

「よいよい、気にするな。」

人が居る事を確認せずに門を開けた手前にも責任はある」

頭を下げ続けるギンジにカラカラと笑いながらその胸と同じくらいデカイ心の広さを見せつける美女。

ギンジにはその姿が女神か聖人の様に見えた。

「ところでお主は何をしに来た？武器と防具の注文か？それとも入信か？」

「はい、ここに入信に来ました」

「そうか、そうか。」

主神様も丁度、暇をしているから話をしてもらうといい」

「本当ですか?!ありがとうございます!!」

いろいろな意味で美女に感謝しながら、ギンジはヘアリストス・ファミリアのホームへと足を踏み入れたのだった。

館の中に入り、応接室に案内されたギンジは主神が来るまで一人で待たされていた。応接室は清潔感に溢れており、壁には鍛冶のファミリアらしく、剣や防具が飾られている。

ソファーもふかふかでとても気持ちがいい。

柔らかなソファアーに体を預けながら、やって来る主神がどんな女神なのか？

ギンジは期待に胸を膨らませながら待ち続ける。

彼の祖父の日記には主神へファイストに関する記述はあまりにも少なく、分かっているのは巨乳で美人という事だ。

時間にして十分だろうか？

ギンジが部屋で一人していると、応接室の扉が開かれる。

もしかして女神様か!?

瞬時に姿勢を正し、扉を見るとそこには……。

「おや？ 僕のお昼寝スポットにお客さんが居るみたいだね……」

謎のカリスマを放つツインテールの巨乳美少女がいた。

この世界の人々で初めて感じる謎のカリスマにもしかしたらロリに目覚めてしまったのかと、不安になるギンジ。

「君。悪いんだけど、そのソファアーは女神である僕のお気に入りなんだ。

変わってくれないかい？」

「え？」

女神……だと？

まさかのロリ巨乳の正体に戦慄するギンジ。

しかし、落ち着いて目の前の幼い女神をよく見て納得した。

鍛冶に適した服装ではないが、祖父の日記にあった通りの巨乳で美人な女神だ。ファミリアには鉄則として女神・男神が一人しか存在しない。

つまり、目の前のロリ巨乳な女神こそが鍛冶の女神ヘファイストスなのだろう。ギンジは彼女に言われるままに、ソファーを譲った。

「うーん！ やっぱりここのソファーは最高だねえ……仕事の後には癒されるよお」
大きな胸を揺らしながら、ソファーにダイブする女神ヘファイストス。

だらしのない女神だが、彼女は世界的に有名な武器ブランドの主神にして最高の鍛冶師。

相当な疲れがあるのだろうと、アポなしで来たことを申し訳なく思いながらもギンジは入信の話をする為に声を掛ける。

「あの……女神様？」

神であり女性でもある女神に失礼がないように名前ではなく女神様と呼んで声を掛けるギンジ。

「ん？ なんだい？」

「俺、女神様のファミリアに入信する為に来たんですが……」

首だけギンジに向け、コロンと寝っ転がっていた女神は『入信』の言葉を聞くと上半

身を勢いよく起き上がらせギンジを見る。

ギンジを見るその表情は、驚愕に満ち溢れていた。

どうやら、先ほどの美女から何も聞いていないようだ。

探している場所で入れ違いになったのかな？

同じ施設で人を探す場合の良くある出来事だと思ったギンジは驚いた表情の女神へファイストスにもう一度、声を掛ける。

その時、しつかり伝わるように目の前の女神に目をしっかりと合わせ、ファミリアに入りたい意欲を全面に押し出す。

「俺、女神様のファミリアに入信したくて、ここまで来ました。

冒険者としての実績や実力はありませんが……女神様さえ、よろしければ俺を女神様のファミリアに入れてくれませんか？」

突然、見ず知らずの男に愛の告白とも取れる入信希望を言われて狼狽える女神。

心なしか、嬉しきかだろうか？女神の顔が赤くなる。

ギンジは目の前の可愛い生き物に心の中で『サンキュー!!』と叫んだ。

「か、かまわないけど……ほ……本当かい？本当に僕でいいのかい？例えば他の女神……
神匠しんしょうと謳うたわれたへファ——」

「構くいません!!俺は、女神様がいいんです!!女神様のファミリアでないと駄目なんです

!!

別の女神を紹介され、遠まわしに断られると思つたギンジは思わずヘファイストスの手を握つて女性を口説くように入信のお願いをするギンジ。

勿論、女性経験のないギンジにここまでやれる度胸はない。

久々の面接を受けるような緊張と地球では感じた事のない、目の前の女神から放たれる萌えとカリスマの様な力に当てられたことにより、一時的にテンションがおかしくなっているのだ。

「ほ、本当に本当だね?!?僕で本当にいいんだね!!」

「はいー!」

ギンジの熱いテンションと言葉に歓喜した女神は喜びの表情を浮かべながらギンジに最後の確認を取り、ギンジは答えた。

答えてしまったのだ……。

「じゃあーさっそく神フェアルマの恩恵を君に授けよう!!

君の名前は?」

「ギンジです!!お願いします!!」

見事なお辞儀を決めたギンジはその後、女神に導かれるままに躊躇する事なく上半身の服を脱ぎ捨て、ソファーにうつ伏せとなって寝転がる。

そして、幼い女神が背中にまたがり、生の太ももとプリプリの尻と背中をなぞる女神の指先の感触に背徳感と僅かな興奮を覚えながら、ギンジは女神から恩恵を授かった。

これで冒険者になれると、ギンジのテンションは最高潮。

規模の大きいファミリアの入信と美少女な女神にお近づきになれた童貞なギンジは幸せの絶頂にいた。

「よし！これで君は僕の初めての眷属!! 《ヘステイア・ファミリア》の最初のメンバーだ!!」

ん？

「ヘステイア……ファミリア？」

「そうだよーさあ、僕たちの輝かしい未来に向かう前にヘファイストスに報告だ!!」

テンションが急激に下がったギンジを置き去りにして、ギンジがヘファイストスだと思っていた女神が去って行く。

……。

……。

……。

……。

やつちまつたあああああああああああ
!!!!!!

3話 ヘスティア・ファミリア

大ポカをやらかしたギンジはフェファミスト・ファミリアではなくヘスティア・ファミリアへと入信した。

彼は現在、ヘスティアの自慢と報告の為に応接室から連れ出され、彼の本命であった紅い髪の麗人。

ヘファミストの居る執務室に居た。

「下界には変わった子がよくいるけど……貴方は私が見た中で、一番変わっているわね。私のファミリアじゃなくて、住居も職もないこの子に入信するなんて……」

「は、ははは。」

高そうな木製の机に肘を乗せ、ジド目でギンジを見るヘファミストの言葉に頬を赤く染めながら苦笑いを浮かべるギンジ。

勿論、彼は女性に虐められて喜びを覚える特殊な性癖はない。

原因は彼の隣に居るロリ巨乳な女神だ。

「ちよつとヘファミスト!!僕の可愛い眷属に変わっているとかなわないでくれよ!!

ギンジ君は真面目で誠実なんだぞ!!」

プリプリと神友しんゆうに抗議するギンジの主神となったヘステイアが彼の腕に抱き着いているのだ。

彼女の幼い容姿からは想像できない凶悪なその胸は彼の腕をサンドイッチし、ヘステイアが動くたびに彼女の温もりとムニムニとした独自の感触が彼にダイレクトに伝わるのだ。

これで頬を染めない男は恋愛対象が女性ではない人間だけだろう。

彼はだらしのない顔を見せないように必死だった。

「ねえ……一応、念のための確認なんだけど……」。

貴方、ヘステイアに何か良からぬ事をしようとか企んでない？」

「へ？」

「へ、ヘファイスト!?何を言ってるのさ!!」

ジド目から鋭い視線へと変化したヘファイストスの質問に呆けるギンジと自分の初めて出来た可愛い眷属にケチをつける神友に憤慨するヘステイア。

まあ、無職で食べ物を食べる時と暇つぶしに散歩に外に出る以外何もせず、特技も何もないダメな女神に突然、ヒューマンの男が入信したいとやって来たのだ。

神友であるヘファイストスからしたらギンジはよからぬ事を企んでヘステイアに近づいてきた怪しい奴以外の見えないのだ。

そして、ヘファイストスの言いようのないプレッシャーと鋭い視線に晒されたギンジはヘファイストスにビビりながら正直に答えた。

「い、いえ、何も企んでいませんが……」

「そう、ならいいわ。」

疑ってしまって、ごめんなさい」

ギンジの言葉に追及も疑いもせず、優しい表情になるヘファイストス。

普通ならこの程度の言葉だけでは人は信用しない。

でも…彼女たちは頂上の存在である女神だ。

地上に舞い降りた神々は己の力を封印し、人と変わらぬ不便さを味わいながら地上で生活している。

しかし、最低限の権能が彼らにあり、ギンジが感じている彼女たちの謎のカリスマ…
神威。

そして……嘘を見破る力。

この力でヘファイストスは、少なくともギンジがよからぬ事を考えてヘステリアに近づいたのではないと確信したのだ。

「ほらね!!ギンジ君は悪い奴じゃないよ!!」

なんたって、僕のファミリアに入りたいて言ってくれた子なんだから!!」

「ハイハイ、ごめんなさいね。」

最近、闇派閥が怪しい動きをしているってタレコミがあったのよ」

「分かればいいんだよ!!分かれば!!」

ヘファイストスの懸念も自身の身を心配してくれていると直感で理解しているヘステイアはこれ以上の文句は言わず、上機嫌になった。

そんな神友に呆れた表情を見せたヘファイストスは笑顔でヘステイアに告げた。

「じゃあ、ヘステイア。」

眷属も出来た事だし、仕事とファミリアのホームを探しに行かないとね。

もう、ここには泊めて上げる事はできないんだから」

「へ?」

突然の神友の言葉に凍り付くヘステイア。

そして、そんなヘステイアを無視するように笑顔で言葉を続けるヘファイストスに不思議な圧力を感じるギンジ。

「貴女……ここに居候する時に言ったわよね?」

眷属を見つけたらすぐに出て行って働くから、それまで泊めてくれって。

覚えているわよね?

勿論……お金は一ヴァリスも貸さないわよ」

「……あ」

過去に言った己の言葉を思い出したヘステティアは背筋が凍った。

地上で神友に甘えに甘えて、ニートをしていた彼女はそのままお金が貯まるまで眷属であるギンジと居候を続け、お金が貯まったら出ていくつもりだったのだ。

もし、彼女が普段からヘファイストスの店でアルバイトでもしていたのなら、ある程度の貯金でポロアパートの一室を借りれたのかも知れない。

だが、地上に降りてから働いた事のない彼女の貯金はゼロ。

文字通りの一文無し。

普段の彼女なら見苦しい程の駄々っ子を披露し、お金を借りようとしただろう。

しかし、初めて出来た眷属の前でそんな無様は晒したくないと踏みとどまった。

彼女は自分の眷属と自分の明日の為にどうやって、目の前の神友からお金を借りようかとギンジの腕を離し、顎に手を当てながら頭をフル回転させた。

「あの……ヘステティア様？住居ならありますから大丈夫ですよ？」

今のやり取りで、目の前の女神たちの関係性を理解したギンジは自分の主神が借金を作る前に声を掛けた。

資金ゼロの状態でするのには避けたかったのだ。

「ほ、本当かい!？」

自分の眷属の言葉に頭を悩ませていたヘステイアは喜色満面の表情を浮かべてギンジに詰め寄る。

「ええ。食料もありますので、しばらくは持ちますよ」

「ヤッホー!! さすが僕の眷属!! 愛してるよギンジくーん!!」

「はふう」

考えはしていたが打つ手が駄々をこねる以外に全く思いつかなかったヘステイアはギンジに飛びつき抱きしめた。

そして、ヘステイアに抱きしめられた事により、今まで感じた事のない極上の柔らかさを全身で味わいながら一瞬だらしのない顔と声を晒すギンジ。

そんな二人を微笑ましい表情で自分の子が巣立ちでもしたかのように優しく見守るヘファイストス。

目的のファミリアに入れなかっただけでなく、ニートをしていた女神のファミリアに入信してしまったギンジ。

しかし、彼には不安も悲壮感もなかった。

彼の胸にあるのは、隣の女神とまだ見ぬ仲間達と紡ぐ冒険の物語に馳せる思い……

と、美少女女神との生活にちよつと期待しているスケベ心だ。

4話 初めての冒険と宣伝

北東のメインストーリーートにある二階建ての真新しい看板が設置された古いお店。『MARメル』の前に二人の男女が居た。

「いつてきます」

「ああ、気を付けて行ってくるんだよ！

お店は僕に任せておいてくれ!!」

男は安い革鎧に身を包んだ軽装の姿をしたギンジとメリロとお揃いのメイド服に身を包む少女はニートから店の店員にジョブチェンジしたヘスティアだった。

二人が出会った翌日からヘスティア・ファミリアが誕生し、ダンジョンを運営管理する『ギルド』に登録されてから一週間が経過した。

この一週間、ギンジとヘスティアは今後の方針とギンジの祖父から引き継いだアビリティに関する情報秘匿の話し合い。

および、日本で受けるパソコン授業とヘスティアに商品であるARMに関する授業に時間を費やされ、ギンジは冒険者としてダンジョンに向かう事が出来なかった。

だが、本日。

ついにギンジは冒険者としてダンジョンへ、ニートから店の店員となり本日が初仕事である主神ヘステアに見送られながら待望の冒険に向かったのだ。

ワクワクしているギンジの心を体現するように軽い足取りで、全てのメインストーリーが合流する中央広場にやって来た。

彼はここでダンジョンのある摩天楼施設《バベル》へと入り、地下へと降りていく。「講習で聞いたけど、本当に照明がない状態でダンジョン内は明るいんだな……」

ダンジョン内に入ると壁や床が薄い青色の壁が発光しており、視界は良好。

ギンジはポケットに忍ばせていたペンライトを使う事なくダンジョンを降りていく。

一階層：二階層と過ぎていくが敵であるモンスターが未だに発見できていない。

ギンジは足を止める事なく四階層まで突き進む。

彼が四階層の奥まで辿り着くと周囲の地面からピキッ！と幾つもの破砕音が鳴り響く。

ギンジが音に警戒するように周囲を見渡すと、ダンジョン床から少し長い爪と緑色の肌が特徴の腕が生えていた。

モンスターの母体であるダンジョンの力によって、モンスターが誕生した瞬間だった。

誕生したばかりのモンスターは地上に這い出て、その姿をギンジに晒す。

「ギャギャー！」

「ギャー！」

「ギャギャギャギャー!!」

出てきたのは頭部に角とトンガリ耳を生やし、下半身には大事な部分を隠す為なのだろうか？

茶色い剛毛に覆われた醜悪なモンスターが鋭い牙と爪を使って、ギンジを威嚇を始めた。

低級モンスターと言えど、レベル1の駆け出し冒険者にとっては油断すればそれなり
のケガをする危険なモンスターだ。

しかし……。

「おお!!ゴブリンだ!!本物だ!!」

先ほどの警戒は何処へやら、ギンジは生まれて初めてその目に焼き付ける事となった
モンスターに瞳を輝かせていた。

もし、彼がスマホを所持していたら目の前のゴブリンに向けてカメラを連射していた
だろう。

実に緊張感のかけらもない男である。

「ようやくダンジョンに來たって感じ……うお!? あぶね!」

「ギャー!!」

「ギャギャツギャー!」

「ギャギャギャー!」

この、武器を持たず戦う様子を見せないギンジの姿を挑発行為と捉えたゴ布林達は短い腕を必死に伸ばしながら自身の武器である爪を振るう。

ダンジョン史上、最も弱くて取り出せる魔石も雀の涙ほど。

駆け出し以外の冒険者達には道端の石を蹴り飛ばすように排除される悲しい存在である。

しかし、そんな最弱な彼らの中にあるモンスターとしてのちっぽけなプライドに火が付いたのだ。

彼等は本気を出した。

どのゴ布林達よりも憤怒し、目の前のふざけた冒険者を襲い続ける。

だが……ゴ布林たちの短い脚では走って逃げるギンジには追い付けることもなく……。

「エレクトリック……アイ!!」

ゴ布林達から距離を離れたギンジから放たれる雷によって、彼等は一瞬で灰となっ

て消えた。

本来なら魔石を遺したり、《牙》などのドロップアイテムを遺して消える。

どうやら、ギンジの両手の人差し指に嵌められたARM《エレクトリックアイ》によって放たれた雷の威力が強すぎて、魔石を炭化させてしまったらしい。

ギンジは雷によって焦げた地面と《エレクトリックアイ》の威力に満足しながらさらに階層を降りていく。

階段を降りると壁の色が青から緑に変わり、ダンジョンの構造も分かれ道などが増え、構造の複雑化が見られる。

ギンジはここから、右手の薬指に嵌められた空間転移のARM《アンダータ》に現在地を記録し、先に進む。

アンダータは自身が赴き、《アンダータ》に記録させた場所に必要な魔力を支払う事でも人数でも移動させるARM。

ギンジがダンジョンの情報を日記で読んだ時に思いついたRPGのセーブやロードなどを再現したアイテムだ。

勿論、死んだらそこで終わりなのであるから、身に危険を感じたら逃亡する為に使う緊急脱出装置と考えた方が、しっくりとくるかもしれない。

故に、彼は他の冒険者たちに比べて大きなアドバンテージを得た状態で冒険が出来る

のだ。

「ギャ!!」

一瞬で焼却されたゴブリン達と同じように独特な声と共に振るわれるゴブリンの鋭い爪。

敵意の籠ったゴブリンの攻撃にギンジは拳で答えた。

「ギャベエ!」

ギンジのカウンダーを顔面に叩き込まれたダンジョン最弱のモンスターであるゴブリンはゴキイ!と言う危険な音を鳴らして後方へとぶっ飛ぶ。

空を飛んだゴブリンはダンジョンの壁に衝突する事で停止。

ゴブリンはあり得ない方向に首を曲げており、事切れていた。

壁に張り付いたあまりにもグロテスクな光景に気分を悪くしたギンジだったが、灰と小さな魔石に変わった事を確認すると魔石を拾う。

そして、チラリと離れた場所に居る冒険者達の反応を伺う

ギンジがダンジョンに来た目的は冒険だけではない。

自分の制作したARMを冒険者達に宣伝する為だ。

ダンジョンで活躍して冒険を楽しみ、店に訪れる客を確保する。

それが、ギンジの目的だった。

しかし……。

「見た事のない小僧だが……中々の怪力だな。

もしかしてレベル2か？」

「ちっ！見せつけやがって。」

きつと、いつまでもレベル1の俺達を見下してやがるんだ」

「おい、さっさと行こうぜ。」

見せたがりのレベル2様を喜ばせるだけだ」

去って行く深いな声色で会話する冒険者PTの背中にガツカリしながら肩を落とす

ギンジ。

これで15人目。

ギンジは新米冒険者達にARMをPRする為に様々なARMを使用してモンスター達と派手な演出を意識しながら戦っていた。

ある時は風のネイチャーARMでゴブリンを細切れに……。

また、ある時はスコップに変化する武器ARMウエポンによって地面に衝撃はを走らせゴブリンを圧殺。

またまた、ある時は意思のない低級のガーディアン《リングアーマー》にプロレス技

をゴブリンに掛けさせ、猪○ボンバイエ。

ゴブリンの関節という間接が破壊された。

そして、今回は身体能力向上型のネイチャーARMを使用して、ゴブリンを殴り殺したのだ。

しかし、ギンジが想像していた冒険者達の反応は違った。

誰も彼もARMの存在を信じなかったのだ。

風のネイチャーARMを使用すれば…。

『アイツの魔法すげえな…レベル幾つだ?』

『あの威力はレベル2以上だろう。』

こんな上層で見せつけやがって』

衝撃はを作るスコップのARM《バトルスコップ》を使用すれば…。

『あの衝撃波は…スキルか?』

『もしくは魔法だろう。』

俺達みたいなスキルも魔法も何もないレベル1を見下してるんだぜ』

やけくそになって、《リングアーマー》を使用した時は…。

『魔法で召喚した鎧を使って、ゴブリンの関節という間接を外してやがる…。』

『闇派閥の人間か?』

狂っている……まさに、悪魔の所業だ。』

と、こんな感じで今まで見かけた冒険者達に全て逃げられてしまったのだ。小さいとはいえ、魔石は大収穫であったが、ARMの宣伝に大失敗したギンジであった。